米国伝道会「宣教師文書」

若山晴子

神戸女学院の創立は、米国伝道会（American Board of Commissioners for Foreign Missions.-A. B. C. F. M.）日本伝道団の、就中、その独身婦人宣教師たちの、事績である。

すでに『神戸女学院百年史』は、その『各論』においてこの伝道会の来歴を、またその『総説』においてこの伝道会による日本伝道の開始を、それぞれ個性豊かな筆致で語っているが、当神戸女学院史料室は、これらの記述のために、また、これらの記述の故に、いわゆる米国伝道会「宣教師文書」を、貴重な生史料として取り扱うべく心がけてきた。

我々がここで「米国伝道会『宣教師文書』」と称しているこの史料は、一八六九年にD・C・グリーン（Daniel Caosby Greene）が日本に派遣されて以来ほぼ一世紀にわたって、米国伝道会の在日宣教師たちから本国シカゴ本部に宛てて書き送られた、現地報告の書簡集である。

この史料を我々に御提供下さった関西学院大学文学部川村大膳教授は、一九六七年、その全容及び取り扱い方を、「アメリカンボード布教報告書の研究」として紹介しておられるが、それによれば、——

（これらの書簡は）「数十冊にファイルされ、同会による他の海外布教記録とともに、ハーヴァード大学ホートン図書館に保管されている。同会の年次報告をはじめ、ミッショナリー・ヘラルドその他に収録されている日本に関する記事は、いうまでもなくこれにもとづくものである。

一九五五年著者がハーヴァードへ留学した際、アメリカンボード（14 Beacon St., Boston, Mass.）の認可とハーヴァード・エンチン・インスティテュートの財的援助を得て、右史料の一八九五年までの分、三二冊（一冊に約一五〇〇頁がファイルされている）を三二巻のマイクロフィルムに収めて、関西学院大学史学研究室に移し、その後は、文部省科学研究費（昭和三十三年度）及び関西学院大学共同研究費を得て、マイクロリーダーにより原文判読の上タイプライター・コピーによって、史料集成の底本作成に従事し、併せて邦訳校注の研究を続けている。右史料は総計およそ四万五千頁に達する厖大なもので、現在では第一巻分一五〇〇頁が概ね終了した。……」（関西学院大学共同研究I「明治研究」一一頁。）

当史料室において、これらの史料のうち神戸女学院に縁の深い宣教師たちの書簡の一部を、川村教授の御厚意によってマイクロフィルムの写真のコピーとして譲り受け、故鈴木恒彌本学文学部教授の指導のもと、それら手稿の解読及びタイプライティングによる活字化にとりかかったのは、『神戸女学院百年史』編纂のことが正式に議せられる直前の、一九七〇年初夏のことであった。その手順手続きの次第は、概ね、『神戸女学院大学論集』第二四巻第三号に故鈴木教授によって述べられたとおりである。重複するところもあるが、これは、その後のすべての書簡の取り扱い方及び発表の形式の基準をなしているので、ここにその一節を引用し、爾後の「宣教師文書」を御覧いただく際の参

考として供したい。

「本稿のテキストは、他の宣教師文書とともに、ハーヴァード大学ホートン・ライブラリーに保管されているが、先年関西学院大学文学部川村大膳教授が同地に留学の際、これらをマイクロフィルムにおさめ持ち帰り、同教授の厚意によりコピーを許されたものを使用した。インキで手記されている書簡は、百年近い歳月の間に文字はうすれ、あるいは裏面の文字が透けて見え、表裏の文字、行が重なるなど、判読は極めて困難であったが、若山晴子が判読、活字化し、さらにトルコの古都スミルナ（イズミール）にあって、同地の大学のライブラリアンとしての奉仕を終え、アメリカに帰国途上のギーゼンタナー女史（Miss Marguerite Giezentanner）が、これに検討を加えた。これら両人の努力にもかかわらず、判読不能の箇所は数個にとどまらなかった。また、ギーゼンタナー、若山両人の間で、判読に関し意見が相違し、しかもいずれとも決し難い箇所も見られた。これらの場合はその旨を註記し、訳はひかえた。」

爾来、一応活字化の終了した手稿は次の如くである。

タルカット（Eliza Talcott）女史書簡　一八七二年十二月三日―一八八〇年七月七日
ダッドレー（Julia E. Dudley）女史書簡　一八七二年十二月二十四日―一八八〇年八月三十日
バロウズ（Martha J. Barrows）女史書簡　一八七五年九月二十日―一八八〇年一月二十三日
クラークソン（Virginia A. Clarkson）女史書簡　一八七七年四月二十三日―一八八九年四月三日
ブラウン（Emily E. Brown）女史書簡　一八八二年四月二日―一八八九年十月五日
ソール（Susan A. Searle）女史書簡　一八九〇年三月十五日―一八九六年三月二十六日

デフォレスト　(John H. DeForest) 博士書簡　一八七四年四月六日―一八八〇年九月二十七日
デイヴィス　(Jerome D. Davis) 博士書簡　一八七一年十月十六日―一八七三年十二月十七日
ベリー　(John C. Berry) 博士書簡　一八七一年四月一日―一八七三年四月十八日

なおこのうち、本学院の創立者タルカット、ダッドレー、及びその協力者バロウズ、各女史の書簡は、すでに訳出・註記して、『神戸女学院大学論集』第二四巻第三号、第二五巻第三号、第二八巻第三号、第二九巻第一号、同第三号に、それぞれ、「タルカット書簡―訳および註」(一)、(二)、「ダッドレー書簡―訳および註」(一)、(二)、「バロウズ書簡―訳および註」として発表したが、第二代校長クラークソン女史以下のものについては、当史料室の仕事として、このたび発刊を許されたこの『学院史料』誌上において順次紹介してゆくことにした。その第一のものが、別稿「クラークソン書簡―訳および註(一)」である。

解読・活字化という作業開始の元々の動機が、これを何よりもまず学院史編纂の一助とするというところにあったことから、これまでに手がけた史料は凡そ、本学院において主たる責任を負った人々の在任期間中のものと、これと緊密な関係にあった一部の人々の一定時期のものに限られている。とはいうものの、これら宣教師たちに共通の、「小暗い土地(dark land)」に福音の光をもたらそうという使命感は、一般に、その関心の赴くところを、単に一つの学校の経営のみにとどまらせることなく、広く、地域伝道、地方伝道との関わりの中に展開せしめるものであったから、これらの書簡は、しばしば、その当時の日本の様々な事情や、そういう国を相手の異邦人伝道の実態などを窺い知らしめる含蓄ある文言をちりばめ、開明期にあったわが国の社会、文化史上、意義ある証言ともなるものであった。その上、米国伝道会による日本伝道の最初の拠点が神戸であったことから、とりわけ神戸以西の伝道活動にあたる婦人

宣教師たちの大方が本学院を経由してその後の持ち場に出ていったことを思う時、この限られた史料にも、更に少なからぬ普遍性を見い出すことができる。彼らが建て彼らが運営した教会やキリスト教主義学校が多く現在にまで感化を及ぼしている事実が、我々に時空を超えたつながりを想起せしめるからである。

但し、本稿において右の実例を列挙することは、紙数の上でも時間的にも限りがあって当面の問題とはなし難く、それぞれの書簡公表の際の註記もしくは解題においてその都度言及し解明することをもって、その責めを果たした（あるいは果たしつつある）と考えることを、お許しいただきたい。

かくて、これら「宣教師文書」の訳註は、しばしば、書簡訳文の紙数に迫るものとなっている。

また、かかる作業を遂行するについては、川村教授のもとにある庞大な宣教師文書コピーから、必要に応じて、更に他の宣教師たちの様々な記述を参照させていただいているが、これによって我々は、単に「かたそば」の見地に囚われることからいささかなりとも解かれ得るものと信じ、感謝している。更に、これら史料研究のための資料としては、本学図書館の蔵書、殊にミッション・ライブラリーのそれに与るところ大であることも併せて附記しておく。中でも、米国伝道会の年次報告（Annual Report of the A. B. C. F. M.）、同、月刊機関誌ミッショナリー・ヘラルド（Missionary Herald）、ジャパン・ミッション・ニューズ（Japan Mission Nesw）、同伝道会の共働機関である婦人伝道会（Woman's Board of Mission）の月刊機関誌ライフ・アンド・ライト（Life and Light for Woman）、そして「七一雑報」等、宣教師の活躍を伝える様々な刊行物が、伝道団や宣教師各人の厚意によって、ここに遺し伝えられていることを大いに多とするものである。

最後に、「神戸女学院大学論集」に発表した「宣教師文書」の内容を紹介して筆を擱かせていただく。これら各書簡に附された番号は本部における整理番号であって、各人の書簡の数とは無関係である。

タルカット書簡

第三〇八号　一八七二年十二月三日附　ニューロンドン発。
○日本への同行者として友人を推挙する。
第三〇九号　一八七二年十二月十九日附　ニューロンドン発。
○二月には出発の準備が整うと思うこと。（ダッドレー女史の名が出る。）
第三一〇号　一八七二年十二月十三日附　ニューロンドン発。
○先述の友人に現職を離れる意志のなかったこと。ヘボン博士の便りを読んだこと。
第三一一号　一八七三年一月二十一日附　ニューヘイヴン発。
○パスポート事務手配中。
第三一二号　一八七三年一月二十八日附　ニューロンドン発。
○クラーク博士信及び小切手入手のこと。
第三一三号　一八七三年四月十二日附　神戸発。
○日本到着の報〈自分の来日は神戸の伝道団に予告されていなかったこと。デイヴィス家に落ち着いたこと〉。日本語の勉強を始めたこと。
第三一四号　一八七三年六月十六日附　有馬発。
○デイヴィス家で心あたたかいもてなしを受けていること。ドーン夫人やアッキンソン氏一家の来日に備えグリーン家に移るかもしれないこと。日本語の勉強に励んでいること。
第三一五号　一八七四年五月十六日附　神戸発。

○活動の現況〈定例の説教礼拝。日曜学校。祈禱会。聖書研究のクラス。毎朝の礼拝。二四名の婦女子を擁する「わたくし共の学校」〉。鈴木青年の証。ダッドレー女史が三田に赴くこと。神戸の教会の現状。寄宿学校開設の望み。キリストについて語り、驚きや感謝にあふれた反響に接する喜びについて。

第三一六号　一八七四年十二月一日附　神戸発。

○九月に送られた荷物のお礼。ガールズ・ホームを建てる許しを待っていること。しかし学校外での、家庭婦人たちの間での活動に心ひかれること。ベリー夫人の友人の来日が許されなかったことについて。レヴィット氏の消息。新島氏への期待。

第三一七号　一八七四年八月七日附　神戸発。

○寄宿学校に寮母を—という願いを伝道会が却下したことに対する弁明。夏期休業のこと。有馬の景観。有馬で一人の青年にイエスの話をしたこと。ベリー、デイヴィス両氏、ドーン夫人の消息。ダッドレー女史は三田に出かけていること。三田教会設立の希望が出ていること。

第三一八号　一八七四年十二月五日附　神戸発。

○ベリー博士を訪ねて来た青年の求道ぶりについて。この青年は、もはやキリスト教迫害のおそれはないと確言していること。

第三一九号　一八七五年八月四日附　神戸発。

○クラーク博士のボストン復帰を祝う。自分たちの経済的窮状に対する同情に感謝すること。アッキンソン氏が建築委員会の議長をつとめること。学校への期待と、一般婦人伝道継続の可能性について。三田教会設立とダッドレー女史の尽力。ゴードン博士、ベリー博士夫妻、グールディ女史、デイヴィス氏一家、ダッドレー女史、新島氏の消

息。

―以上、「神戸女学院大学論集・第二四巻第三号」所載。―

第三二〇号　一八七六年十月十八日附　神戸発。

○「ホーム」の写真を同封すること。校舎増築を検討中。課業、学費、受洗学生のこと。教職担当の婦人宣教師をもとめること。バロウズ女史の来日をありがたく思う。ダッドレー女史の病気。独身婦人宣教師の効用について、本部の問い合わせに答える。学校の生徒たちの動向〈異教徒の夫のもとへ。／宗教活動を禁じられて。／婚約者をキリスト教に導いて結婚〉。ジェインズ大佐来阪のこと。ポーター女史の消息。ホームの写真の説明〈写っている人々の名を加えて〉。人力車・京の寺・梵鐘の写真の説明。スタークウェザー、グールディ、フィーラー、スティーヴンス各女史の消息。学校の目的は生徒たちをキリストに達せしめることであり、またこの人々が他の人々の教師となれるよう助けることであるという自覚。伝道区外(ステーション)での活動〈明石。兵庫〉。

第三二一号　一八七七年二月六日附　神戸発。

○学校財政に関する本部の質問に答える〈建築基金、日本人教員俸給、生徒増加に伴なう諸経費、光熱費、食費、雑費等の出費の現状と学費収受の状況。完全な財政的自立(セルフ・サポート)はまだ無理であること。校舎の増築を迫られていること〉。活動の実りの一例―婚約者をクリスチャンにした生徒。しかもその夫は、妻の妹を澤山牧師と娶せる労をとったこと。バロウズ女史の日本語の進歩。ダッドレー女史の帰神。学校のために本国の校長職経験者をもとめること。スタークウェザー女史にも助力者がほしいこと。

第三二二号　一八七七年八月七日附　比叡山発。

○学校の設備拡充のための基金に関する出願についての返事の督促。新館の建築計画とその目途について。知的教育を心がけているが、「最大の望み」はキリスト教教育であること。生徒の消息〈家族を「イエスに引き寄せ」一家揃って教会に入った少女。／わがままで片意地であった少女の進況〉。比叡山での夏休み。ダッドレー、バロウズ両女史の消息。神戸の婦人たちや神学校の学生たちの伝道について。

第三二三号　一八七八年三月二十九日附　神戸発。ワード氏宛。

○スミス社のオルガン発註依頼。クラークソン女史の消息。

第三二四号　一八八〇年七月五日附　神戸発。

○クラークソン女史が学校責任者となったこと。自分は秋に岡山に赴くこと。神戸を去る感慨と岡山への期待。ペティー夫人の消息。ウィルソン女史のこと。ケロッグ女史の来日について。クラークソン女史のためホワイト女史の派遣を乞う。近く牧師の妻となる少女のこと。神戸教会の松山牧師への期待。福音活動における日本婦人の評価〈神戸における模範。／岡山の祈禱会での例〉。

―以上、「神戸女学院大学論集・第二五巻第三号」所載。―

ダッドレー書簡

第六九号　一八七二年十二月二十四日附　エルギン発。

○近況。三月一日までには出かけられるようにしたいこと。友人を推挙。

第七〇号　一八七三年二月十四日附　ヤンクトン発。

○全ての手はずが整ったこと。タルカット女史の手紙を受けとったこと。友人に活動参加を奨励していること。伝道

活動に対する意欲の表明。

第七一号　一八七四年六月二十日附　神戸発。

○日本滞在一年余の感慨―土地と人とに愛着をもつ。活動のこと〈勉強。学校開校。家庭訪問と聖書を読む会〉。ホームの必要について。三田での活動について。なお助力者のほしいこと。

第七二号　一八七六年三月二十日附　神戸発。

○バロウズ女史派遣を感謝する。学校について―タルカット女史が校務の、自分が家政の責務を負うこと。学外の活動について〈兵庫。尼崎。三田。京都に対する関心〉。

第七三号　一八七七年一月一日附　京都発。

○新年の挨拶。昨年八月来病気療養中であること。京都での生活について〈皇后の行幸。神学校学生の活動。タルカット女史の来訪〉。（神戸の）学校の増築の必要性について。婦人宣教師の増員を期待する。教師としての自分の資質についての疑問。兵庫教会の現況―村上代理牧師のこと。松山出身の聖書学徒のこと。松山伝道に赴く希望。

―以上、「神戸女学院大学論集・第二八巻第三号」所載。―

第七四号　一八七八年二月十四日附　神戸発。

○健康回復の報。学校業務からは手をひいたこと。兵庫での活動について〈信徒の状況。婦人の聖書のクラスのこと。礼拝式への出席。兵庫の土地柄について〉。明石伝道について〈始まりと停滞。昨年十月該地に赴き爾後の手はずを整えたこと。世話役井上氏と、ある集会を機縁に禁酒を誓った男の話。病床にあってキリストを伝える医師。キリスト教に耳をかたむける人々。信徒たちの状況〉。兵庫周辺の二つの村での活動。アッキンソン氏がバロウズ女

史と自分とを四国伝道に誘っていること。神戸を離れる時が来たらバロウズ女史と共に「内地」にホームを持って活動にあたりたいこと。

○追伸。「ハドソン」（船舶）の積み荷について。クラークソン女史の消息―タルカット女史は後継者の態勢が整い次第学校業務から手をひくであろうが、クラークソン女史は待機の時をもてあましていること。

第七五号　一八七八年四月十八日附　神戸発。

○明石伝道に関して、ジェンクス氏とクラーク博士との交信を嘆くこと―明石での活動の実態〈自分はそれほど苦労してはいないこと。婦人たちの勉強の状況。多聞通教会の山田医師が伝道活動のため移住したこと〉。間もなくアッキンソン氏バロウズ女史と共に四国伝道に出かけること。アッキンソン氏の土佐伝道のこと。明石の一婦人より贈られた「観音さん」をこの便に託すこと。

第七六号　一八七九年十月七日附　神戸発。

○明石における活動について〈水曜の晩の祈禱会のこと。婦人たちの模範的生活。男子の集会。主日に来てほしいと要請され、兵庫での活動とのやりくりに悩むこと〉。兵庫の教会について〈緩慢ながら成長していること。長老と一婦人信徒との間の悶着について。金銭事情の好転したこと〉。来週の今治訪問の予定。「子供たちの心身の訓練に関する本」を出版する準備をしたこと。「クリスティーの古いオルガン…」なる物語翻訳の可能性について。クラークソン女史病気休養のためタルカット女史が代理をつとめること。

第七七号　一八八〇年八月三十日附　有馬発。

○明石、兵庫、今治、三田で活動してきたこと。明石が最も進展していること。今治で婦人のための活動を始めたこと。婦人の助力者を養成するクラスを作る必要について。自分たちはこの秋ホームを去ること。クラークソン女史

のためにホワイト女史の来日を願う。バロウズ女史と共に着手しようとしている活動の見通しについて。タルカット女史に対する惜別。

―以上、「神戸女学院大学論集・第二九巻第一号」所載。―

バロウズ書簡

第一号　一八七五年十一月十二日附　ミドルベリイ発。

○日本でダッドレー女史を助けるようにとの召命に応じること。

第二号　一八七五年九月二十日附　ミドルベリイ発。

○ダッドレー女史に日本での伝道活動について問いあわせたこと。熟慮し友人たちにも諮って、返事を差し上げたい。

第三号　一八七六年一月六日附　ミドルベリイ発。

○書類と為替手形受領の礼。旅仕度に関する助言をもとめる。ボストンに赴く予定について。荷物代金の支払方法について。

第四号　一八七六年一月十三日附　ミドルベリイ発。

○旅仕度のための送金依頼。前便の問い合わせ事項につき指示を乞う。

第五号　一八七六年一月十八日附　ミドルベリイ発。

○小切手受納のこと。追加送金依頼。昨晩の会合について。ボストン、シカゴ行きの日程について。荷造りをしたこと。

○追伸。サンフランシスコでの宿泊場所をたずねる。

第六号　一八七六年一月二十二日附　ミドルベリイ発。
○同封されたはずの小切手が見つからないこと。サンフランシスコよりシカゴに長居したい。ボストンでレヴィット氏に会えれば最終旅程が決められようこと。
第七号　一八七六年一月三十一日附　ミドルベリイ発。
○ボストン行きについて。準備完了の心境。
第八号　一八七六年八月七日附　神戸発。
○日本到着六ヵ月後の感慨〈赴任を感謝。日本での活動に生涯をかけたい〉。三田教会の景況。神戸教会に新入会員のあったこと。兵庫の教会の設立式に列席したこと。日本語の勉強について。有馬での休暇。現在、タルカット、ダッドレー両女史にかわってホームの面倒を見ていること。自分の先生が熱心なクリスチャンになったこと。郷里の友に真理の道を伝えようと四国に帰っていった青年のこと。
第九号　一八七七年十二月六日附　神戸発。
○クラークソン女史を迎えて〈新来者を迎える喜び。クラークソン女史のトルコへの執心について。女史の性急な着手のこと。女史の態勢の整うのを待ちたいこと〉。タルカット女史の健康状態について。多忙な毎日。ダッドレー女史の恢復について〈学校業務復帰は最善ではない。目下、兵庫、明石辺の伝道活動に従事していること〉。新館の建築の進んでいること。少女たちはクリスチャンとしての生き方を身につけつつあること。財政事情について。伝道会の負債解消に同郷者が寄与したことを誇りに思う。
第一〇号（第九号に添附）
○一八七七年九月までの収支決算メモ。

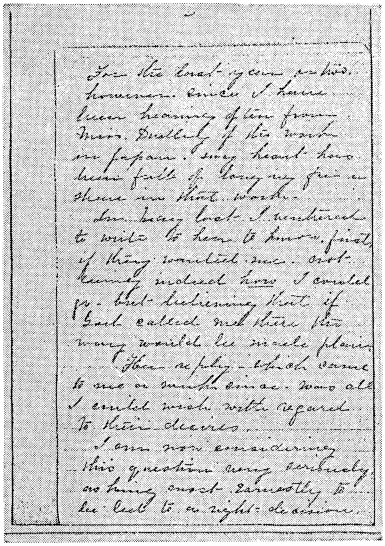
第一一号　一八八〇年一月二十三日附　横浜発。

○体調をくずし横浜で静養中であること〈過去一年は試煉の年で皆が過労に陥ったこと。グリーン夫人の誘いを受けて神戸を離れたこと〉。かかる故障の原因、対策について思いめぐらす〈ホームの特殊性について。学外活動を断念するわけにはゆかないこと―ホームの仕事を引き受けてくれる人があれば、ダッドレー女史と共に新しい土地で婦人のための活動に専心したいこと〉。

―以上、「神戸女学院大学論集・第二九巻第三号」所載。―

宣教師文書より　バロウズ女史の書簡

―一八七五年九月二十日附。



For the last year or two, however — since I have been hearing often from Miss Dudley of the work in Japan — my heart has been full of longing for a share in that work.

In May last I ventured to write to her, to know, first, if they wanted me, not seeing indeed how I could go — but believing that if God called me there the way would be made plain.

The reply — which came to me a week since — was all I could wish with regard to their desires.

I am now considering this question very seriously, as being most earnestly to be led a right decision.

上の文面を活字化したもの。